

## シネマ日記



No. 73

○月×日 「人生の特等席」(ロバート・ローレンツ監督) は82歳のクリント・イーストウッドが老いをさらけ出し排尿に苦勞するシーンから始まる。この主人公は米メジャーリーグで長年、経験と勘を頼りに金の卵を発掘してきた伝説的スカウトのだが、球団ではデータ分析に背を向けた一徹ぶりが時代遅れだとして、そろそろお引き取りを願おうとしている。そんなとき、長年、疎遠だった娘(エイミー・アダムス)が休暇を取って、父に会いに来る。娘は幼い時に母を亡くし、父娘だけで暮らし始めたのだが、ある事件に遭って後、親戚に預けられて育った。だから、娘は父に捨てられ

たと思っている。今や有能なやり手の弁護士になっているのだが、会ってもケンカするばかり。でも、父娘にやがて新しい関係が育ってくる…。ある有望選手のスカウトの旅に出た二人、老いのため目もかすんできた父に代わり、父の目になろうとする娘。その有望選手ははたして将来、大行者になれる本物なのか…。野球を通じての父と娘の心温まる愛情物語だ。が、なんといい見所は、ある映画評にもあったようにイーストウッドの「颯々たる老い」のカッコ良さだ。老いを受け入れ、年齢を重ねることの楽しさが彼にある。

○月×日 太平洋戦争下、米軍は日系人を主として日本語のわかる秘密情報部員として、また戦後は占領軍の通訳として活用した。ドキュメンタリー「二つの祖国で・日系陸軍情報部」(すずきじゅんいち監督)はその秘密機関の日系二世の元兵士たちの証言を中心に、米国籍の秘密情報を織り交ぜて描く。彼らは米国籍を持ちながら、米国内で人種差別と戦い、一方、父母の

祖国と戦う運命を受け入れた、まさに二つの祖国に翻弄された人々だ。今や80歳以上の高齢者たちばかりだが、長い沈黙を破って語りだした。その苦悩の真実に、戦争が生んだ運命の過酷さを覚えずにいられない。

○月×日 本場ロンドンやNYブロードウェイで30年余も演じられてきた傑作ミュージカルを映画化した「レ・ミゼラブル」(トム・フーパー監督)はヴィクトル・ユゴー原作の優れたドラマ性やテーマ性に加えて、音楽は素晴らしく、大いに堪能した。ジャン・バルジャン役のヒュー・ジャックマン、ジャベール警部役のラッセル・クロウはじめ、コゼットやマリウス役など俳優たちの歌唱力には感心した。

○月×日 「100万回生きたねこ」(小谷忠典監督)は同名の名作絵本の作者・佐野洋子のドキュメンタリーだ。2年前にがんで亡くなったが、本人は「誰でも死ぬときは死ぬのだから、がんを闘っていますなんて姿を撮るのはばかばかしい」と言って、顔が出ること

なく声だけが出演する異色作品だ。百万回死に、百万回生きた不思議な猫同様、「人間も風のように生き、誰かを愛し、そして死んでいく。その在るがままの繰り返し」と語る佐野さんの死生観が説得的に映った。

○月×日 2012年の公開映画の中から独断と偏見で印象に残った作品を選ぶと、(外国)①ポエトリー・アグネスの詩、②ヘルプ、心がつなぐストーリー、③人生の特等席、④レ・ミゼラブル、⑤J・エドガー、⑥サニー 永遠の仲間たち、⑦思秋期、⑧シエイム、⑨別離、⑩ヒューゴの不思議な発明、(日本)①あなたへ、②希望の国、③かぞくのくに、④11・25自決の日、⑤三島由紀夫と若者たち、⑥終の信託、⑦わが母の記、⑧夢売るふたり、⑨道々白磁の人、⑩北のカナリアたち、⑪おおかみこどもの雨と雪(アニメ)、(ドキュメンタリー)⑫二つの祖国で・日系陸軍情報部、⑬相馬看花―第一部 奪われた土地の記憶、⑭ニッポンの嘘 報道写真家 福島菊次郎90歳。(内藤 哲)